

お金の豆知識

金座の歴史

日本銀行金融研究所貨幣博物館

◎金座の所在地

金座は、江戸幕府発行の金貨を独占的に製造した機関です(大判をのぞく)。かつて江戸の金座は日本銀行本店本館の位置にありました。

◎初期の金座での金貨製造

初期の金座(元禄の改鑄^(注)以前)は、老中(ろうじゅう)もしくは留守居役(るすいやく)が直轄し、幕府の御金改役(ごきんあらためやく)である後藤庄三郎光次が管轄する組織でした。このころの金座の製造方法は「手前吹(てまえぶき)」といわれ、専門の製造所を設置せず御金改役の指示をうけて小判師が自宅で小判のもととなる原判金をつくりました。それらは後藤家に集められ、検定で合格したものに後藤家が極印(ごくいん)を打ちました。

(注)改鑄とは貨幣を製造し直すことで、金貨や銀貨に含まれる金や銀の量を増減させました。

◎江戸が金貨製造の中心へ

従来の分散型の製造方式は管理上適当でないということから、元禄の改鑄以後、江戸に本局(日本銀行本店本館の所在地)、京都と佐渡に出張所を置き、江戸を中心に金貨製造を行う集中生産体制に改められました。また、金座は勘定奉行(かんじょうぶぎょう)の支配下に置かれ、幕府の機関として再出発しました。

◎金座の最後

金座は、銀貨の製造機関である銀座とともに、幕府の崩壊に伴って明治新政府に接収されました。その後、約1年間、貨幣司(かへいし)は、金貨(二分金^(にぶきん))を製造しましたが、明治2年(1869年)、造幣局(ぞうへいきょく)の設立によって名実ともにその歴史に幕を閉じたのです。



金座の跡地に建つ日本銀行本店本館
辰野金吾(たつのきんご)博士の設計により
明治29年(1896年)竣工。
昭和49年(1974年)2月、重要文化財に指定。

小判ができるまで(「佐渡金山之図」「金座絵巻」より)

コラム

「佐渡金山之図」「金座絵巻」には、金座における小判製造作業が描かれています。



①採掘所

金の鉱石を掘り出します。



②金銀吹分所

金と銀の混合物から金を抽出します。



③棹金鑄造

溶かした金を棒状の型に流し込みます。



④延金所

金を打ち延ばします。



⑤小判荒造場

1両の重さに切った金を小判のかたちに打ち延ばします。



⑥樋目場 端打場

小判に細かい細工を施します。



⑦色付場

小判の表面に金の成分を浮き出させ、黄金色に仕上げます。



⑧包金所

出来上がった小判を和紙に包み、封印しています。